

Title	哲學から教育へ, 川合貞一著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.146(452)- 148(454)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論をなほよく織りなしてゐる。怯懦遲鈍の善人ルイ十六世、調和的策士ミラボー、豪快瀾達の機會主義者ダントン、熱情と細心の陰謀家ロベスピエール、果ては『佛蘭西を救ふには頭首と劍を要す』この國民の要望に應じて、終に革命を終熄せしめたる帝國主義的大野心家ナポレオン等、つぎつぎに現出する人物とその事業とは、本書によつて極めて適切に、興味多く論評されてゐる。

一體生物の進化に於いては漸進的過程をこるのが常であるけれども、しかもなほ時として異常突發の形をこる場合がある。まして自然法則を以つて全く律することのできない人類生活に於いては、かゝる異常突然はなほさら可能性が多い。歴史上に於ける革命はすべてかゝる異常突發の現象である。而して革命は呪ふべきものか、讚美すべきものか知らないけれども、吾々の豫想を絶する事變であるだけ人類生活に大影響を與ふる重大事であつて、現代の世界史的最大事變たるロシア革命のごとき殊にさうであつた。この大事變を親しく見たる吾々は、さらに翻つて百三十年前の世界史的最大事變たるフランス革命を回顧する必要がある。殊にわが國人の一部が非常に恐れをなしてゐる多くの外來思想、例へば『サンヂカリズムでも、ホルシエヰイズムでも、マルクス主義でも、決して今度の大戰を機會として發した產物ではないのである。是等の思想の起源は、何れも第十八世紀末の佛蘭西大革命に發生して居るのである。其れで我國に流入して、在來の思想と或は混和し、或は反撥して、所謂改造運動の動機となり、新文化の要素とならんさしつゝある是等の思想の由來を探らうと思へ

ば何うしても此の佛蘭西革命に遡つて研究せねばならぬ。』(序文) 學者も政治家も現在の特權階級も一般民衆も、その研究によつて各自その地位と使命とに就いて何等かの自覺と反省とを與へらるゝであらう。而して本書はそのフランス革命研究の最良書の一つであつて、著者はわが慶應義塾文學部史學科教授として西洋史擔當せられ、特に英國憲法史、西洋中世史、フランス革命史に造詣深き人なることを思へば、本書の價値と權威とについては喋々するを要しない。

(杉本芳六)

哲學から教育へ

(川合眞一著
東光閣發行)

本書はかつて本誌上に於いて紹介したる『現代哲學への途』の姉妹篇ともいふべきものであつて、その所論は、『主としていばば廣い意味での哲學に屬する他の諸科の學と教育學との限界領域に關するものである。』即ち一、哲學と教育、二、文明及び文化、三、文化の問題、四、民族性と教育、五、群衆の心理と教育、六、教育の今昔、七、個人主義と團體主義、八、國家に對する現代思想の傾向、九、軍國主義と産業主義、十、新國家思想の先驅者の十篇からなる。この目次によつて明かなることく、本書は系統的教育學の書ではなくして、著者の世界觀人生觀に基き、その體驗によつて批判されたる廣き意味の教育に關する著者の見解であり、それだけわれらにとつていちぢるしい興味と多大の啓發とを與へらるゝ。『惟ふに 育なるものは、ナトルプの言つてゐた通り、全

人の陶冶であるから、廣くして、且、深い基礎の上に立たなければならぬ。従つて其の考察に於てもさうあるべきである。』而してこのことは、わが歴史の範圍に於いても言はるべきであつて、歴史は全人類の生活過程の研究であるから、なほさら廣くして且つ深い考察に立たねばならぬ。従つて歴史家は、かゝる考察の基礎となるべき該博なる知識と、深遠なる世界觀との獲得につきむべきであつて、そのためには本書のごとき誠に最良の手引き書と言ふべきである。

本書に於いてその量からも、またその内容からも最も重きをなすのは、『哲學と教育』及び『民族性と教育』の二篇であるが、ことに後者はわれら歴史の學徒にとり直接教へらるゝところが極めて多い。われらは屢々民族といふ語を用ゐるが、しかしその用法は極めて曖昧であり、時として血族的關係の異同によつて民族を區別し、ために非常な不都合を生ずるのである。しかるに本書の著者はドイツのラツアルスに從つて次の見解をとらるゝのである。即ち『民族の概念は自然に與へられたる差別に精神的、歴史的關係が交渉する所から起つて來るのである。で、民族をして民族たらしめる所のは本質上、血統とか言語とか云ふやうな客觀的關係其の物に存してゐるのではなくして、唯自からを同一民族に屬してゐるものと考へる民族の成員の主觀的見解に存してゐる。』『隨つて茲に謂ふ民族なるものは、客觀的の要素を基礎とした人類學上の概念ではなくして、主觀的見解を基礎とした純粹心理學的概念であるのである。』而して民族には必ず共同精神なるものがあるが、この共同精神は初めから與へられたものではなく

して、出來て來たものであつて、之を指して民族の精神、若くは民族性と言ひ、この民族の精神は個人の精神に先だつのである。かくのごとく民族及び民族性を民族心理學的に解明したる後、現在ヨーロッパに於いて最も重きをなせるアングロ・サクソン民族、ドイツ民族、及びフランス民族の精神と教育との關係を叙述してゐる。この篇と相關聯して『群衆の心理と教育』も亦すこぶる有益である。群衆の關與大なる革命乃至暴動の歴史を研究するにあつて、群衆の意義及びその心理の理解の必要なるは言を俟たない。

更に當今やかましい文化問題については、『文明及び文化』と『文化の問題』との二篇がある。著者は、ドイツの文化が人間から解き放たれた非人格的な文化、作業的文化であり、イギリスの文明が主として個人の修養を基礎とした文明、換言すれば人格的要素の勝つた文明であり、フランス文明が人間生活の美的享樂的文明であることを明かにし、而してこれら三の型の文化が互に相容れないものでなくして、實に相補すべきものであり、この三の型の結合融和に眞の文明、文化を認め得ることを説いてゐる。一體文化なる語はリツカートの所謂『價值ありと認められた目的に隨つて行動する人間に由つて直接に生産されたものか、または既に存在するものであつても、少くともそれに附着して居る價値の爲めに有意的に養護されたもの』と云ふやうな意味を表すものとなり、従つてこれは人間の有意的行動によつて結果したる精神的産物であるから、一面に於いて時代の影響をうけるものゝ、しかし一面に於いては時代を超越した人間性の現れである。従つて文

化にはその本質上アルシヨア文化、プロレタリアの文化といふがごとき區別のあるべきものではない。それ故従来の文化が主としてアルシヨア階級によつて創造され、エンシヨイされ、専有されたからと言つて、それが本質上間違つた文化であるのではない。それ故文化のプロレタリア化は文化の墮落であり、立派なプロレタリアの文化などは決してあり得るものではなく、もし今日の文化に缺點ありとせば、それは文化の社會的普及に足らざる所があるだけで、この文化の普及が廣い意味の教育事業であると述べられた點は、世の文化論者の大いに味讀すべきものであらう。

とにかく本書は、『現代哲學への道』と共に、わが學界及び一般思想界に於いて重大なる價值を有する書として精讀されることを信じて疑はない。

(松本芳夫)

日本社會史序論

(佐野學著
同人社書店發行)

本書は最近佐野學氏により公にせられた「社會制度の諸研究」の姉妹篇ともいふべきものである。著者は序論中にいふ、今までの歴史書は政治史であつたと非難することは不當でない。治者群は政治を、被治者群は労働をする。政治は重要な社會現象であるが、労働の生活がなかつたならば、社會生活は成立しない。眞の社會史が編まれる爲めには、被治者群の歴史が明かとならねばならぬ。埋没された人民の歴史を發掘し、現代への連鎖を辿ることは、現代社會の性質を正しく理解する所以であると共に、將來の

社會進化の方向を知る上に多くの貢獻をするであらう。又いふ、私は日本史に纏てある神秘的要素や觀念論的要素や詩歌的要素を取り去り、これを赤裸な經濟關係や、支配關係に還元し度いと思ふ。同時に人と人とが、等價に勤勞を交換した美しい共存關係の諸形態を發見したいと思ふ。これは私の日本史研究上の指導方針である云々と。かくして本書は生れたのである。

尙ほ本書は一昨年四月から昨年四月まで解放其の他の雜誌に發表したもの、集録であり、本書に序論といふ名を冠してゐる理由としては、今後も研究を續けてゆき、いつかは統一的な日本社會史を書き度いといふほどの意味のものであるといふ序言中の一言によつて明かであると思ふ。

本書は第一編、被支配者階級の諸研究、第一章一揆の歴史、第二章、土民一揆の歴史、第三章、百姓一揆の歴史、第四章、百姓一揆の鎮壓、第五章、古代日本に於ける労働の歴史、第六章、我國人身賣買沿革考、第七章特殊部落民解放論、第八章日本農民史雜考、第二編支配者階級の諸研究、第一章我國治者階級の社會史的考察、第二章奢侈の經濟史觀、第三章社會問題としての華族制度、第三編社會生活史の諸研究、第一章上代日本人より現代日本人へ、第二章我國社會階級史について、第三章我國經濟生活の諸特徴、第四章我國資本主義起源考、第五章社會組織の變動と資本主義社會の成立、第六章我國一夫多妻制度考、こうなつてゐる。土一揆については三浦周行氏の深き研究があるし、特殊部落については喜多貞吉、柳田國男兩氏の注意すべき論文がある。本書を通じて特に著しき見解に接し得ざることを憾とする。